［要旨］

ルソーの歴史認識における「起源」概念について
―コンディヤックとビュフォンを通じて―

淵田　仁

本稿は、ジャン＝ジャック・ルソーの『人間不平等起源論』（以下、『不平等論』）読解を通して、彼の「起源」概念の意味内容および彼の歴史の見方を明らかにすることを目的としている。先行するルソー研究では、『不平等論』における自然状態から社会状態への移行をルソーが描いておらず、それがルソー哲学の弱点だと解釈されてきた。しかし、本稿では、ルソーと同時代のコンディヤックおよびビュフォンのテクストと比較をすることによって、ルソーの「起源論」という記述形式がある一定の意図によって構成されていることを論証した。すなわち、自然から社会へ至る過程におけるルソーの沈黙は、彼の弱点ではなく彼の方法論的戦略を意味する。

その結果、以下のことが確認できた。まず、コンディヤックにおける起源論は根源的原因を探求し、かつ因果関係の連続性を説明するものである。すなわち、反対に、ルソーは起源論を人間にとって説明不可能なものとみなし、それゆえ彼の起源論には必然的に断絶が内在している。

また、コンディヤック的方法論を取らなかったルソーの人類史の叙述法はビュフォンの地質学的方法論に類似している、ということが明らかとなった。すなわち、ルソーは地質学における「現在主義」の立場をとっていた。

結論として以下のことが言えるだろう。ルソーの「起源」概念は、18世紀の最先端の自然科学に多大な影響を受けていた。つまり、ルソーは啓蒙時代の形而上学とは別の潮流、すなわち自然学的系譜に位置していると考えられる。そしてこのようなコンディヤックとビュフォンの方法論との対峙を通して、ルソーは自らの歴史哲学を社会の分析（『不平等論』）から社会の構築（『社会契約論』）に変化させたのである。